

里山ねっと・あやべと綾部市里山交流研修センター ～ 廃校活用と体験交流で里山に関わる多様な主体を結びつける ～

Coordinating Various Players in the Rural Area of Northern Kyoto

-- The Role of the Non-profit Organization "Satoyama-net Ayabe" based on the Renovated Facilities of the Former Elementary School

朝倉 聡

Asakura Satoshi

(1) 「綾部市里山交流研修センター」は生徒数の減少に伴い閉校した旧・綾部市立「豊里西小学校」の校舎を活用した交流施設である。特定非営利活動法人「里山ねっと・あやべ」は宿泊・貸館施設である同センターの指定管理者として、施設の運営や交流活動を行なっている。



綾部市里山交流研修センター

(2) 綾部市は人口 3.4 万人で京都府北部、日本海側の由良川流域に位置し、福知山市や舞鶴市に隣接する。市内には「黒谷和紙工芸の里」（旧・口上林小学校）など 4 つの廃校活用施設があり、綾部市里山交流研修センターもそのひとつである。

(3) 豊里西小学校は豊里東小学校と統合されて 1998 年度をもって閉校し（閉校時の全校生徒数 48 人）、施設は 2000 年に綾部市里山交流研修センターとなった。里山ねっと・あやべはセンターを管理活用する団体として設立され（当初は任意団体）、2006 年 3 月に NPO 法人化そして同年 4 月以降、センターの指定管理者として指定され今に至っている。センターは当初、宿泊機能がなく、貸館対応や日帰りの体験、情報発信、農家民泊の発掘などをおこなっていた。2006 年に改装されて宿泊も可能となったほか、多目的ホール「幸喜山荘」が新設された。

里山に関わる多様な主体



(4) 現在の業務のひとつは貸館の利用対応で、施設内には貸部屋のための会議室が複数あり、市の管理条例に定められた料金体系にしたがって利用を受け付ける。また宿泊を利用する団体の対応もある。里山ねっと・あやべは指定管理者として、管理条例に定められた利用料を収受する。施設の一部は厨房・食堂に改造されており、団体宿泊客には食事提供もおこなう。

(5) 綾部市は施設管理（狭義の指定管理）を基本としつつ、施設を活用して交流事業を行うことをふくめて指定管理者の業務としている。田植えやそば栽培などの農業体験、石窯パンやそば打ち、みそ作りなどの料理体験、竹林整備と竹炭焼きなどを体験として提供している。地元には山越えの峠道や、つつじの群落のある尾根など、低山であるが故に誰でも親しみやすい里山があり、そうした資源を活かした里山探訪の体験も提供している。また最近では里山での獣害の深刻化に対応して、ジビエ料理の体験などもおこなっている。そのほか農家民泊体験の希望者には農家民泊を紹介することを含め、綾部の人と自然の魅力に触れてもらう体験窓口としての役割を果たしている。

(6) 当初は、里山ねっと・あやべが空屋情報の集約や空屋見学対応など、具体的な移住サポートまで行っていた時期もあるが、一元的な窓口の必要性から、2008 年に綾部市があやべ定住サポー

特定非営利活動法人里山ねっと・あやべ, Satoyama-net Ayabe(NPO) キーワード: 中山間地域、廃校活用、NPO、指定管理、都市農村交流、コーディネート、人件費

ト総合窓口を設置した。最近は、具体的かつ手続き的な定住サポートは綾部市が担い、里山ねっと・あやべは田舎体験の入口としての上記の体験を提供するかたちになっている。



地元住民と里山の木階段
づくりをする大学生たち

(7) 里地里山に立地する交流体験施設として、当事者は地元と都市の双方にわたり、ニーズも多種多様であるので、多様な主体を結びつけるコーディネートの作業が必要となる。まず貸館や宿泊の受入、体験活動の提供においても、日程調整や体験内容、体験を受け入れてくれる地域の個人ないしグループの確保などが必要であり、基本的な意味でのコーディネートといえる。単独での体験事業だけでなく、他団体との共催形式の事業もある。たとえば指定管理事業とは別の財源として綾部市から団体補助金を得、「綾部里山交流大学」というセミナー事業をおこなっているが、それは里山ねっと・あやべだけでなく行政や大学研究者などからなる協議会の形式である。また都市農山漁村交流活性化機構との共催で、「廃校活用現地セミナー」、また「京都丹州木材市場」という木材市場との共催で「京都丹州もくもくフェスタ」を開催したりしているが、そのように多くの関係者を伴う共催や実行委員会形式でイベントやセミナーを行なうためにもコーディネートの必要である。

(8) 大学実習や企業の CSR など、ボランティアや研修の要素の強い事業のコーディネートもある。センターの周辺ではグンゼ株式会社がモデルフォレスト活動を行なっている。里山ねっと・あやべは京都府中丹広域振興局の森づくり推進室とともに、グンゼのモデルフォレスト活動をサポートしている。また田舎や里山は大学のアクティブラーニングの場としても注目されるようになっている。宿泊型の学びや調査もできる綾部市里山交流研修センターは複数の大学のフィールドワークやボランティア実習の拠点として活用されており、立命館大学サービスラーニングセンターとの共同事業「綾部里山再生プロジェクト」を典型として、地元課題をセレクトしながら若い学生たちの実践的な学びにつなげている。このように地域から課題を発掘して大学に提案し宿泊型のプログラムを大学と調整していくのも里山ねっと・あやべの役割となっている。

(9) 以上の事業をおこなう基盤としての NPO 法人の運営自体にも色々な調整が必要であり、ボランティアな組織である NPO 法人の運営という意味でのコーディネートという論点もある。里山ねっと・あやべの事業規模は毎年、二千数百万円、うち綾部市からの指定管理料は一千五百万円（2014年度）である。NPO の事務局に勤務する常勤職員が 4 名であり、他に調理スタッフや清掃などパートタイム職員もいる。事務局以外に理事会（無給・非常勤の理事で構成される）もある。四年ごとの指定管理更新、毎年の年度協定、毎月の実績報告などを通じて綾部市との情報共有や協議を行なっている。地元自治会、理事会、パートタイムスタッフやボランティアの人々、そして施設を貸館・宿泊や交流のため利用してくれる人々、体験受入をしてくれる個人や団体、そうした多様な主体のなかで、意義のあるカップリングを見いだし、調整し、実現していかなければならない。

(10) コーディネートにまつわる論点のひとつはコーディネート経費である。体験交流や課題解決型事業には補助金を活用することが多いが、往々にして事務局の人件費も外注人件費も補助金の対象にならない。従って上掲のような調整作業は地域の団体ないし個人が無償で行なっていることが多い。大学の合宿受入に関しても宿泊等の実費以外に調整経費がつく場合もあればそうでない場合もある。実りあるコーディネートを通じて達成感ある交流を実現するためには、地域でコーディネートを行なう団体や個人が財政的にもサステイナブルであることが必要である。